露地で4カ月 越冬不要

青パパイア スピード収穫

メーカーが品種提案

本州産地化に期待

健康食材として農家が直売所で販売する他、JAが産地化を進めている青パパイア。本州を中心に、果実ではなく野菜のように食べる栽培が広がる中、種苗メーカーが冬越ししない1年完結の栽培モデルの普及に乗り出した。成長の早い多収品種を育てて冬が来る前に収穫し終えるもので、露地栽培が難しかった本州でも産地化に向けた動きが活発化しそうだ。（北坂公紀）

パパイアは中南米原産で、複数年にわたり実を付ける多年生植物。黄色く熟した実は果実として食べられる他、熟す前に収穫した青パパイアはサラダなどで食べられる。特に青パパイアは、ビタミンやポリフェノールといった栄養成分、ダイエット効果があるとされる酵素を豊富に含み、健康食材として注目されている。

一般的に、パパイアの収穫は定植の翌年以降に本格化する。ただ熱帯原産で凍害に弱く、気温が0度を下回ると枯死するため、国内では越冬が栽培上の大きな課題だ。そこで、種苗メーカーの丸種（京都市）は、パパイアを1年完結で栽培するモデルを示した。

この栽培で鍵を握るのが品種だ。同社では成長が早く多収の6品種を提案。苗木の定植1年目で1本当たり約30個の収量を実現し、単年での栽培を可能にした。

栽培モデルでは5月ごろに30㌢程度の苗木を定植。4カ月後には樹高が最大2㍍に達し、1個1㌔前後の実が収穫できる。実は秋にかけて断続的になり、本州では完熟しないため青パパイアとして利用する。収穫後、冬場になると木は低温で枯死し、さらに春先まで放置すれば腐敗が進み、土にすきこむことができる。

同社は「越冬が不要だと、従来は九州南部に限られていた露地栽培が、関東以西で可能になる」と説明。「越冬するための設備投資や燃料費が必要なハウス栽培に比べ、生産コストを大幅に抑えられる。手軽にパパイア栽培ができる」と強調する。

販売初年の2019年の苗木の販売量は約5000本。20年には大きい果実が収穫できる品種「フルーツタワー」を発売して品ぞろえを充実させ、販売を強化する。

5月に定植したパパイア。4カ月で最大2㍍の高さに成長する（滋賀県湖南市の丸種研究農場で）

機能性注目 生産が拡大

農水省によると、データがある直近の16年の国内生産量は487㌧で、前年から倍増。過去10年で最多となった。県別では果実の生産が中心とみられる鹿児島県が364㌧と最大で、全体の7割強を占めている。

果実の産地振興や消費拡大に取り組む中央果実協会の朝倉利員審議役は「パパイアは獣害や病害が少なく、生産に取り組みやすい。近年は機能性成分に注目が集まっており、消費は増加傾向にある。葉を茶に加工するなど、利用の幅も広がっている」と期待する。

古里野菜弁当

静岡・JA遠州夢咲と菊川市立河城小学校

静岡県の菊川市立河城小学校の5年生47人が芽キャベツやサトイモなど、地元の野菜を使った弁当セット「ワクワクドキドキ河城弁当」を考案した。JA遠州夢咲が次代を担う子どもたちに向け、地元食材の理解促進の一環でメニュー作りを依頼。JA直売所で14日から期間限定で販売する。

弁当のテーマは「ごはん・みそ汁・お茶」。女性部や生産者組織などJA組織や営農指導員らが支援し、事前に授業で、芽キャベツの特徴やみそ加工を説明した。

JAは5月に、芽キャベツをメインにした弁当のおかずやみそ汁の具材のレシピを依頼。提出された約160種類のレシピから、JA直売所内で総菜を製造販売する女性部の部

「ワクワク

今年の漢

世相を表す「今年の
「令」が選ばれ、京都市
清水寺で12日、森清範貫
（きこう）した。元号が
まり新たな時代の希望を